～令和５年度下半期　わたしの一句～

皆様の思い出の一句をお楽しみください。

トマト供えおかれてありし集乳缶	鈴木八駿郎
庭石菖ひとみ凝らして戦問ふ	荒川　美恵
長靴の底すり減りて雪解風	中村きみどり
生まれたての欠伸そよそよ蕗の薹	脇本　文子
スランプの真中亀の声をきく	早川千鶴子
唇はいつも血の味四月吹雪く	鮒橋　郁香
ジャンプする裸体の光サクラマス	寺田　保子
雑草刈って澄んでこれから寝る自由	山本　勲
万緑や風の匂いの切手貼る	江波戸　明
とんぼだま瞥に清涼持ち帰る	芳賀　知子
炎昼を転がしているフライパン	脇本　千尋
コンテニューのきかない僕ら夏の果	金野　克典
妻の手をにぎり返して夏惜しむ	北原　白道
生きている限りは昭和十六年	中島　土方
八月のどの戸もすぐに開く不安	粥川　青猿
鳩吹いて栗鼠に揺れをる木のひとつ	よしざね弓
星が飛ぶわたし的には左側	村川三津子
伸び悩む情の偏差値牽牛花	西村　奈津
習慣の夕刊廃刊長き夜	佐藤かよ子
里の盆ポツリポツリと墓終い	中尾　克彦
名月や森のカムイの低き聲	小飼　紫香
秋日向桜耳という名刺	中島　加奈
レモンティ九月の雨を聞きたくて	松原　静子
訳あり林檎わが咎を許すまじ	斉藤　郁子
生きる予定ばかりの手帳今年酒	菅原　釈子
南瓜割るスタンディングオベーション	飯沼　風華
とうきびの甘き湿りをむさぼりぬ	吉田　洋子

さくら紅葉はらり卆寿の只中に	横地　妙子
落葉松はからまつなりと謳いおり	吉野喜代子
蝦夷罷魔冬の院に鎮まるか	清水　健志
海鼠かむ話し相手は欠礼葉書	山田美智子
鬼呼（オニッ）の踏み潰されし実玫瑰	石川　青狼

会員句集案内

▼俳句集「案愚工房」　山陰　進

昨年二月に逝去された山陰進氏のご遺族が、山陰氏の俳句１９８句を年代順に纏めて今年一月に発行された。そのうちの２０句以上は自筆の作品で、見慣れた懐かしい文字からは山陰氏の穏やかな笑顔が偲ばれる。

タイトルの「案愚工房（あんぐうこうぼう）」とは故人が書斎に付けたお名前とのことで、「七十年の俳句生活ご苦労さまでした。（中略）句会の帰りには必ずトロフィーを抱え、ニコニコして帰って来ました。」（後書きより）という山陰氏。きっと今ごろはこの句集を手にされて、ご家族のご労苦に感謝されているに違いない。

改めまして、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

▼俳誌「幻日」

東北海道現代俳句協会会長の石川青狼氏を中心に七名が集い、昨年十二月に俳誌「幻日」を創刊した。「自由かつ個性的であれ」の志をもって誕生したこの俳誌は、一人２０句の俳句とそれぞれの作品鑑賞から成り、年二回の発行を目指す。

釧路現代俳句会　十一月句会

住宅街こんもりコキア紅葉出でて　荒川　美恵
南瓜割るスタンディングオベーション　飯沼　風華
赤い月蝦夷狼の黙深し　小飼　紫香
足先に寒さの残る骸かな　金野　克典
訳あり林檎わが咎を許すまじ　斉藤　郁子
人と人殺し合ってる神無月　佐藤かよ子
熊笹をざらざりずざる冬ざれて　清水　健志
整備士に渡されるはつ冬の鍵　菅原　釈子
秋灯下指揮者楽しきバックシャン　寺田　保子
秋香る「太陽の手」の街盛ん　那珂剣坊子
月天心光と影を浮かしおり　中尾　克彦
青春（あおはる）と言えば間に合いそうだ鰯雲　中島　加奈
すりすりとピンク電話に秋の蠅　中村きみどり
ライダーのラストスパート白鳥来　西村　奈津
秋深む船村メロディはろばろと　芳賀　知子
本題に入る潮時や新走り　早川千鶴子
抽斗よりひょっこり兜太秋の虹　鮒橋　郁香
からっぽの家にストーブ本五冊　村川三津子
だみ声のはしぶと鴉冬に入る　横地　妙子
蔦紅葉アダムとイブの位置にゐる　よしざね弓
乗り継ぎの駅のベンチの日向ぼこ　吉田　洋子
落葉松はからまつなりと謳いおり　吉野喜代子
婆娑羅ばさら朴落葉踏む別れ路　脇本　千尋
綿虫の大量発注ミスでした　脇本　文子
カラフルな呼吸たそがれどきもみじ　石川　青狼

釧路現代俳句会　十二月句会

踏みこめる少年を待つ初氷　荒川　美恵
誰れ呼ぶより亡き子呼ぶとき息白し　飯沼　風華
セーターのトナカイこむら返りです　小飼　紫香
去年今年全ては主神の掌　金野　克典
不揃いは個性という赤い手袋　斉藤　郁子
冬帝や生きる講座を受けている　佐藤かよ子
人喰うて神にはならず蝦夷罷　清水　健志
作業着のポケット多し聖樹点く　菅原　釈子
チェリストの背筋の響き秋惜しむ　寺田　保子
窓と言ふ小さき宇宙動く秋　那珂剣坊子
やまぶどう熊に気遣い蔓を引く　中尾　克彦
名は疾うに忘れたらしいポインセチア　中島　加奈
からしばれ真神があくびする寝床　中村きみどり
大鷲を見んと絞られし瞳孔　西村　奈津
オーヴァーの重たさいつかのあたたかさ　芳賀　知子
くぐもるる障子越しなる生返事　早川千鶴子
頑なを通したき日や霜の花　鮒橋　郁香
喪の家の人の出入りや暮早し　横地　妙子
検尿の湯気高らかに今朝の冬　よしざね弓
出窓に南瓜妣おはすところなり　吉田　洋子
退院を待つ塀沿いの返り花　吉野喜代子
揺籃や春待つ耳に翼あり　脇本　文子
待たされて逆立つ冬毛ももももも　脇本　千尋
木枯のタイムバーゲンです五分　石川　青狼

第七十五回　釧路市芸術祭　市民俳句大会

令和五年十月二十二日（日）　於市立中央図書館

主催・釧路市文化団体連絡協議会

▼入賞句

三位　百歳を見据える歩幅天高し　山田美智子
四位　生きる予定ばかりの手帳今年酒　菅原　釈子
五位　少しづつ椅子つめ合って温め酒　村川三津子
八位　一卓は読み書き食事色鳥来　早川千鶴子
十位　飄飄と箸より軽き秋刀魚食う　飯沼　風華

▼石川青狼会長特選

蜻蛉戦ぐクローザーの背番号　中島　加奈

▼成瀬明副会長特選

生きる予定ばかりの手帳今年酒　菅原　釈子

▼会員作品抄

風葬の雄鹿連綿冬木の芽　清水　健志
茶会後の散骨話秋気満つ　西村　奈津
虫集く聞く耳のないおとなたち　斉藤　郁子
車庫のシャッターしぶしぶ上がりそぞろ寒吉田　洋子
分岐点枯葉いちまいの重さ　鮒橋　郁香
還らざる島のいくつや鳥渡る　横地　妙子
秋茄子のすべて肯定して寡黙　小飼　紫香
合唱のパート練習秋澄めり　吉野喜代子
半月の残り探して迷い道　中村きみどり
終止符を打ちて本番秋扇　寺田　保子
父さんの頑固のかけら冷奴　佐藤かよ子
手術場のチームワークや秋日和　荒川　美恵
おしゃべりがすぎる背高泡立草　石川　青狼

釧路現代俳句会　十月句会

湿原を敲きつけたる秋の雨　荒川　美恵
夕日よくばる末枯にたつ女　飯沼　風華
名月や森のカムイの低き聲　小飼　紫香
値踏みする命の軽さ濡れ枯葉　金野　克典
名月やテールランプの君の街　斉藤　郁子
習慣の夕刊廃刊長き夜　佐藤かよ子
只今訓練中オーバーランの枯葉　清水　健志
秋高し好きなものから喰うけもの　菅原　釈子
正装の戦が毀つ人柱　寺田　保子
皇孫の国づくり思考荒れる秋　那珂剣坊子
秋冷や別れの言葉透明に　中尾　克彦
最短で鬼に捕らわれたき枯野　中島　加奈
小豆煮る喋り足りない奥方ら　中村きみどり
秋思かな戻らなくても良い場所に　西村　奈津
最暑とふ木の葉よく枯れ只落ちる　芳賀　知子
秋夕焼使ひ果して部活終ふ　早川千鶴子
古酒酌むや魔女に近づく誕生日　鮒橋　郁香
雨上がる空はゆうらりゆらり秋　村川三津子
ま青なる舎利塔の空鳥わたる　横地　妙子
水澄みて隠しきれない尾鰭かな　よしざね弓
街の灯を敷きつめ昇りゆく満月　吉田　洋子
秋うらら不要不急の旅に出る　吉野喜代子
振りかぶる子象の鼻や秋高し　脇本　文子
足元にしゅるんと消えたきのこのこ　脇本　千尋
臥待ちや小百合もすなるストレッチ　石川　青狼

釧路現代俳句会　八月句会

この世をば戦ぎ尽くして梅雨穂草　荒川　美恵
茄子漬ける塩の尖りを丸くして　飯沼　風華
勿来越え妻のふる郷夏旺ん　北原　白道
野暮用と言葉濁して心太　小飼　紫香
線状降水帯夏草の惑い　斉藤　郁子
葉隠れの術何と大きなズッキーニ　佐藤かよ子
秋桜死に蜂を抱き揺れもせず　清水　健志
白シャツや地下鉄は光をめざす　菅原　釈子
閉めたかと又もたしかむ熱帯夜　寺田　保子
積ん読を斜めに読ます終戦日　那珂剣坊子
昆布漁沖どめとなる熱中症　中尾　克彦
それほどは遠くにゆけず鼠花火　中島　加奈
汗あせも汗汗あせも汗病院　中村きみどり
長持の中に家系図原爆忌　西村　奈津
猛暑かなグレタ・トゥーンベリさんに続きます　芳賀知子
アイコンタクトばっちりと夏の夜　早川千鶴子
悔いなんて残るものさと初もみじ　鮒橋　郁香
星が飛ぶわたし的には左側　村川三津子
バーベキューのにほひの残る庭花火　横地　妙子
水蜜桃脱がば潤ほふ小指かな　よしざね弓
秋夕焼け阿寒ポークに塩胡椒　吉田　洋子
海霧寒をかきまわし来る避暑一団　吉野喜代子
百万のヒマワリ洗脳されている　石川　青狼

釧路現代俳句会　九月句会

盆すぎの生ぬるき朝また今日も　荒川　美恵
ほぼ垂直な梯子で銀漢へ　飯沼　風華
妻の手を握り返して夏惜しむ　北原　白道
残暑光黒曜石を巡る道　小飼　紫香
戦争に正装をする幾星霜　金野　克典
直毛に海霧可愛げないまつ毛　斉藤　郁子
いも掘りの孫の歓声秋日和　佐藤かよ子
虫集く生前葬の幕が開く　清水　健志
あの監視カメラはダミー穴惑　菅原　釈子
一人居に戻り虫の音届きくる　寺田　保子
水を切る石切れぬ石夏の川　那珂剣坊子
里の盆ポツンポツリと墓終い　中尾　克彦
道産子の子象の眠り星月夜　中島　加奈
桃の実や腕に残りし傷の痕　中村きみどり
伸び悩む情の偏差値牽牛花　西村　奈津
とんぼだま瞭に清涼持ち帰る　芳賀　知子
幸水の水をこぼして梨をむく　早川千鶴子
人間を見おろし残暑の山牛蒡　鮒橋　郁香
己には無月も優し不帰の人　村川三津子
海霧深しクルーズ船のキャビンの灯　横地　妙子
枝豆や禁酒一月目の目付き　よしざね弓
風鈴も金魚すくひもテレビの景　吉田　洋子
自転車の少年来　夏草の匂い　吉野喜代子
辛辣な浜風が友鬼薊　石川　青狼

第二十一回大とかち俳句賞全国俳句大会

〈雑詠句の部〉

遠汽笛夫の癖字の種袋　松原　静子
母の初恋青き毛糸のぼっこ　斉藤　郁子
夫の手に胎動きかす更衣　早川千鶴子
助手席に霧の深さをたのしめり　吉田　洋子
理科室の頭でっかちどの蝌蚪も　粥川　青猿
どこからが空か日高の春の連なり　西村　奈津
父と子の魂の相寄る夏座敷　吉野喜代子
神様を納めるごとく袋掛　江波戸　明
放課後の遣らずの雨や水中花　金野　克典
さみどりのまりあの月の紙を梳く　脇本　文子
麦秋やペダル踏みしめ老教師　小飼　紫香
春寒の反芻廃棄・飼料・借金　佐藤かよ子
そばの花戦争語る人おらぬ　鈴木八駿郎

第三十四回　お～いお茶新俳句大賞　佳作入賞

長靴の底すり減りて雪解風　中村きみどり

釧路現代俳句会　七月句会

庭石菖ひとみ凝らして戦問ふ　荒川　美恵
私が私でよかった日のトマト　飯沼　風華
生きるとは朴訥なもの髪洗う　小飼　紫香
心太見ればしみじみ母の事　佐藤かよ子
真っ白き花弁蹴落す蜂の尻　清水　健志
送電線果つや大花独活の崎　菅原　釈子
旧居跡汗に夜風の旧知めき　寺田　保子
百歳に日脚を合わす午睡かな　那珂剣坊子
津波の碑海を見つめる橋に建つ　中尾　克彦
梅雨明けの初物みたいな青空　中島　加奈
しわくちゃのジャガイモの皮蜥蜴めき　中村きみどり
鳴りやまぬ猿のシンバル風死せり　西村　奈津
夏至間近愛が履かせるピンヒール　芳賀　知子
夏夕べ森はしづかにもやを吐く　早川千鶴子
「愛」を掲げ日盛りの消防車　鮒橋　郁香
ノウハウはなくていいのと南瓜割る　村川三津子
綿すげや此たびは海霧の霧多布　横地　妙子
なめくぢの死をべりべりと剥がしけり　よしざね弓
葉桜やピッチャー交代の広場　吉田　洋子
波風をたてるも浮世古団扇　吉野喜代子
海霧に潰され海鵜低く飛ぶ　石川　青狼

第二十一回大とかち俳句賞全国俳句大会

令和五年九月二十四日（日）　※関係分のみ

〈課題句（牛）〉の部　投句数七二二句

▼帯広市民劇場運営委員会賞

・宮坂静生・鈴木八駿郎特選

トーチカの海霧へざらつく牛の舌　粥川　青猿

▼優秀賞

・五十嵐秀彦・粥川青猿特選

夏野に砲声首水平に牛立てり　吉野喜代子

▼佳作

・星野高士特選

牛飼いの嫁よ早よ来よ夏銀河　粥川　青猿

・石川青狼特選

トマト供えおかれてありし集乳缶　鈴木八駿郎

・十河宣洋特選

八月や牛の重みがちょうどいい　清水　健志

牛飼いの父の長靴風光る　松原　静子

牛蝨の登山牛の背越える足　中村きみどり

ねまる牛帰省の児等とにらめつこ　早川千鶴子

大盛牛丼掻っ込んで夏の陣　飯沼　風華

干草や百頭牛舎の咀嚼音　中島　土方

棄てられた牛の乳染む寒月光　江波戸　明

海霧深しチーズケーキは牛の柄　西村　奈津

高速バス牛たち抜けて盆休み　脇本　千尋

春暁や牛いっせいに俺を見る　佐藤かよ子

牛襲ふオソ十八の茂る闇　寺田　保子

牛百頭飼ふ夢持ちて入学す　よしざね弓

空っぽの牛乳瓶に挿す野菊　石川　青狼

〈雑詠句〉の部　投句数七五八句

▼十勝文化団体協議会賞

・五十嵐秀彦・桂せい久特選

蝦夷栗鼠のらせんの夏を駆けあがる　菅原　釈子

・中原道夫特選

灼け狂う星の匂いか虫時雨　清水　健志

・石川青狼特選

もっと緑雨を今から恋が生まれるの　よしざね弓

形から入る一輪紅い薔薇　村川三津子

日焼して労働の魚拓となりぬ　菅原　釈子

・瀬戸優理子特選

深追いはならぬと八月の朝刊　村川三津子

墨書展

十月九日（木曜日）～十一月十六日（木曜日）

◇作品のご協力ありがとうございました

石川青狼（３点）、小飼紫香、佐藤かよ子、斉藤郁子、清水健志、菅原釈子　寺田保子、西村奈津（２点）、芳賀知子、村川三津子、吉田洋子、鮒橋郁香

◇今後の行事予定◇

・〈東北海道現代俳句協会第３４回総会、及び第３０回俳句大会
　令和６年４月２１日（日）釧路市生涯学習センター6 階
・第３３回北海道現代俳句大会
　令和６年６月９日（日）ホテル・リソル（函館市）

◇会員動向◇

現在会員数　34 名

転入　中村きみどり、脇本文子、脇本千尋（いずれも札幌より）

◇編集後記◇

2024 年は厳しい幕開けとなりましたが、会報 17 号をお届けいたします。
今年の皆様の俳句に行かせていただければ幸いです〈斉藤〉

巻頭言「辰年の夢」

東北海道現代俳句協会
会長　石川　青狼

令和六年、辰年が明けました。辰は十二支のうち唯一架空の動物ですが、どんな夢を見せてくれるのでしょうか。

昨年は新型コロナが五類に分類されて種々の規制が解除され、特に観光地などでは賑わいが戻ってきたようです。また釧路の俳句界でも吟行や懇親会などが行われるようになり、楽しい時間を過ごすことができました。

しかしロシアのウクライナ侵攻やイスラエルとパレスチナの問題も平和への方向を見出せず、更に元旦午後に発生した能登半島地震は何度も震度５以上を記録し、犠牲者も増えています。二日には羽田空港に於いて航空機同士の衝突・炎上という悲惨な事故が起こりました。どちらもまだ収束を見せておりません。

現代俳句協会の大きな出来事としては、四月一日付で社団法人化されたことがあります。これにより社団法人（いわゆる本部）と地区協会はそれぞれ独立の存在となりましたが、会員の俳句活動については従来と何ら変わることはありません。ただ、今迄は居住地の地区協会に所属という決まりでしたが、今後はそれが自由となり、早速、札幌在住の三名が当地区へ転入。また新規入会も一名あり、会員減少の悩みが少しだけ解消されたところです。

しかし根本的な課題は残されたままです。よく、現俳入会のメリットは？と聞かれますが、一番のメリットはやはり会誌「現代俳句」で俳句が読めること。そして詠めること。また、詠んだものを読んでもらえることと、そこから新しい出会いがあることです。それから折々の評論なども知識を広げてくれます。今いる場所で楽しみたい人、それに飽き足らずステップアップしたい人。それぞれの立ち位置を固めて「俳諧自由」の夢を広げていきたいものです。

東北海道現代俳句協会会報
第17号
令和6年1月20日

東北海道現代俳句協会
発行人　石川　青狼
編集人　斉藤　郁子